

令和7年度 神奈川県立高等学校及び中等教育学校 生徒による授業評価の結果について

(1) 概要

目的	生徒の確かな学力を育成するため、各学校における教員の指導力の向上や授業の改善を図るとともに、生徒自らが学習への取組を見つめ直す機会とする。
対象	全県立高等学校及び中等教育学校（後期課程）の全生徒
調査期日	第1回は夏季休業前、第2回は冬季休業前を目途に各学校が設定した日
内容・方法	各学校において、授業の在り方や学習の状況について、「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」「あまり当てはまらない」「ほとんど当てはまらない」の4段階の評価によるアンケート方式で実施した。

(2) 主な結果（第2回の集計結果）

＜共通教科における「かなり当てはまる」と「ほぼ当てはまる」の合計の割合＞
（単位：％、令和7年度の（）内は、令和3年度と比較した際の増減）

質問項目			実施年度				
	共通小項目		令和3	令和4	令和5	令和6	令和7
授業の在り方について	1	毎時間の授業や単元（内容のまとめ）のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある	86.8	85.7	86.8	87.6	88.0 (+1.2)
	2	単元（内容のまとめ）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある	84.2	84.4	85.9	86.9	87.5 (+3.3)
	3	単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある	87.1	87.0	88.4	89.1	89.5 (+2.4)
学習の状況について	4	授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた	86.9	86.3	87.6	88.2	88.7 (+1.8)
	5	他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた	83.8	84.1	85.6	86.5	87.1 (+3.3)
	6	授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた	86.2	85.8	87.5	87.9	88.5 (+2.3)
	7	授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた	87.7	87.3	88.6	89.2	89.5 (+1.8)

- 学習指導要領改訂に伴い、質問項目を令和元年度から全面的に変更している。
- 令和7年度の共通教科では、共通小項目1～7いずれも肯定的な回答（「かなり当てはまる」と「ほぼ当てはまる」）の割合が、昨年度を上回った。特に共通小項目2、5及び6においては0.6ポイント上昇している。また、令和3年度との比較では、すべての項目が上昇しており、7項目の平均でも2.3ポイント上昇している。これらから、各学校が取り組んでいる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた組織的な授業改善の成果が、一定程度表れていると考えられる。

＜課題の改善の方向性＞

「対話的な学び」に関する共通項目2・5は、他の共通項目と比較して肯定的な回答の割合が相対的に小さい。これは、「対話そのものの活動」は行われていても、対話を通して自分の考えを深める過程が十分に成立していない、または生徒が考えの変容を実感しにくい可能性を示している。今後は、対話活動に加えて、対話前後の思考の記録など、思考の変容を可視化する機会を授業に位置付けるとともに、協働的な学びを充実させた授業づくりの改善点を具体的に示し、学校を支援していくことが必要である。

I 「生徒による授業評価」報告書について

- 全県立高等学校及び中等教育学校（後期課程）における11月1日から各学校で実施した「生徒による授業評価」の結果、「生徒による授業評価」に関わる取組及び授業改善に向けた取組などについて集計・分析した。
- 令和7年度の「生徒による授業評価」の評価結果の回答総数は次のとおりである（第1表、第2表）。

第1表 共通教科回答総数

国語	地歴	公民	数学	理科	保体	芸術	外国語	家庭	情報	理数
155,560	87,965	41,592	114,557	110,707	138,200	41,826	149,909	36,735	30,129	3,317

第2表 専門教科回答総数

農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	理数	体育	音楽	美術	英語
6,674	15,943	5,786	1,137	2,056	349	418	1,996	192	2,609	1,219	1,505	1,088

- 学習指導要領改訂に伴って質問項目を令和元年度から全面的に変更し、現在に至っている。（第3表）。

第3表 「生徒による授業評価」の質問項目（共通小項目）

大項目	共通小項目（標準例）		項目の趣旨
授業の在り方について	1	毎時間の授業や単元（内容のまとまり）のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある	「主体的な学び」に関する項目
	2	単元（内容のまとまり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある	「対話的な学び」に関する項目
	3	単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある	「深い学び」に関する項目
学習の状況について	4	授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた	「項目1」と関連の深い項目
	5	他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた	「項目2」と関連の深い項目
	6	授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた	「項目3」と関連の深い項目
	7	授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた	より高次の学びの構築に関する項目

- 学校で取り組んでいる研究の成果指標として活用したり、生徒の実態に即した項目を設定したりするため、7項目の共通小項目に加えて、さらに学校独自の小項目を設定することができる。各学校で独自の小項目を設定する際の参考のために、学校独自の小項目の例を次のとおり示した。

- 新たな知識を獲得し、批判的・論理的に思考する学習活動がある。
- 授業の中で、探究のサイクル（課題設定、情報収集、整理分析、まとめ発表）の各場面に活用できる学びを得ることができた。
- 授業で与えられた問いや、自分で見出した問いに対して、当該単元の内容だけでなく、過去の授業で学んだことや、他教科で学んだことを生かして考えたことがある。
- 授業内での成果物の評価や先生からの働きかけによって、自分の勉強の良い点や悪い点を見つけ、改善することができた。
- 授業の中で、端末を活用し、他者の考えを知り、自分の考えをまとめたり深めたりする機会がある。
- 単元（内容のまとまり）の学習の中で、物事を思い込みで判断せず、自らの考えを客観的にとらえて、物事を多面的に分析する場面がある

2 集計・分析の結果

(1) 共通教科・専門教科の集計結果について

○各教科及び全体について、肯定的な回答(評価「4 かなり当てはまる」又は「3 ほぼ当てはまる」)をした割合を、共通小項目ごとに示した。第4表は共通教科、第5表は専門教科の集計結果である。

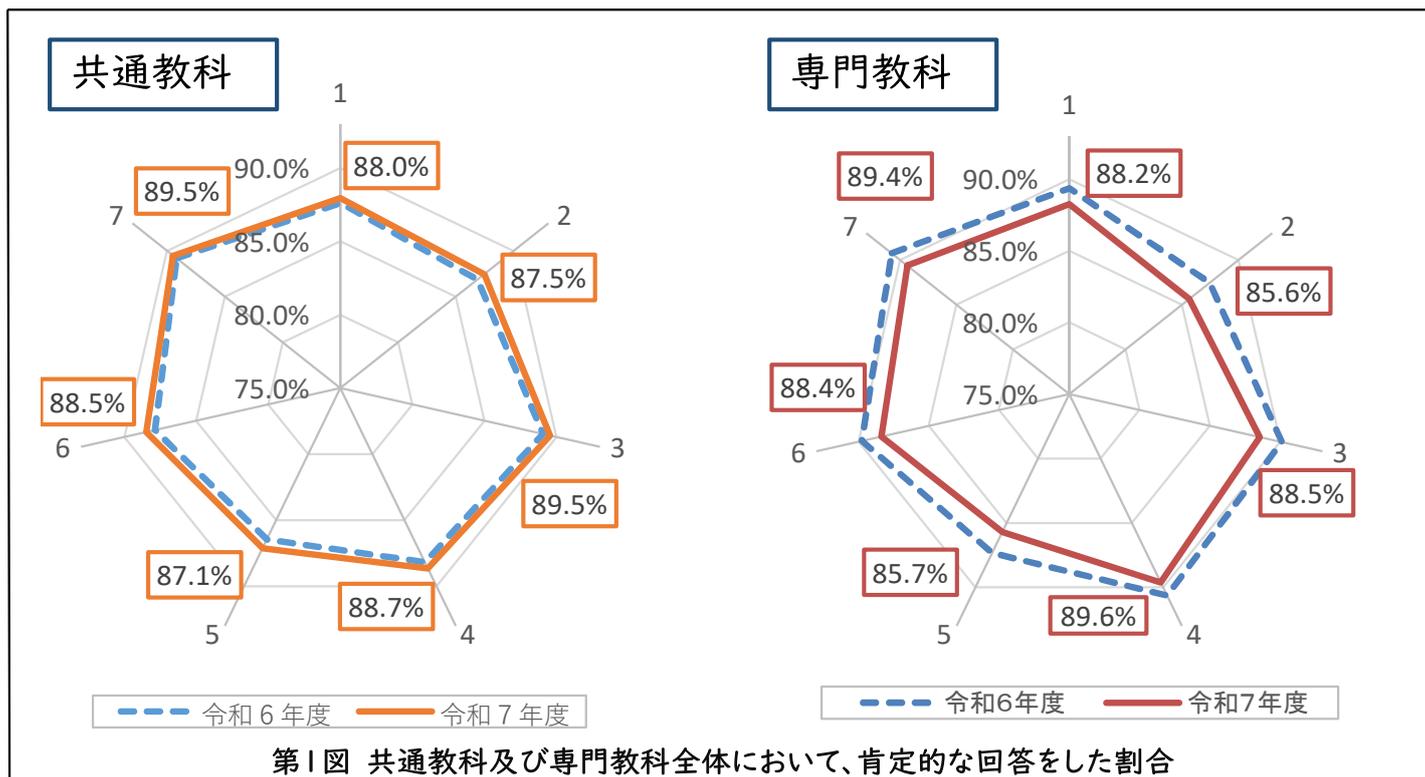
第4表 共通教科の集計結果 (単位は%、小数第2位を四捨五入)

共通小項目	国語	地歴	公民	数学	理科	保体	芸術	外国語	家庭	情報	理数	平均
1	87.6%	89.2%	88.4%	86.8%	86.6%	89.9%	88.3%	87.8%	88.4%	85.0%	90.2%	88.0%
2	89.3%	87.6%	88.3%	85.2%	84.6%	88.2%	86.3%	89.4%	87.1%	83.2%	93.1%	87.5%
3	90.0%	89.4%	89.6%	89.7%	88.3%	90.7%	89.0%	89.5%	89.5%	87.5%	93.7%	89.5%
4	87.4%	87.8%	87.7%	88.8%	86.7%	91.4%	91.5%	88.6%	89.8%	87.4%	87.8%	88.7%
5	88.6%	87.8%	88.6%	85.0%	84.5%	88.5%	87.1%	87.5%	87.6%	83.6%	92.6%	87.1%
6	88.3%	88.1%	88.8%	88.1%	87.0%	90.3%	88.6%	88.6%	89.1%	86.8%	91.9%	88.5%
7	88.4%	91.1%	90.3%	88.8%	88.3%	90.7%	89.4%	90.0%	90.3%	86.8%	90.0%	89.5%

第5表 専門教科の集計結果 (単位は%、小数第2位を四捨五入)

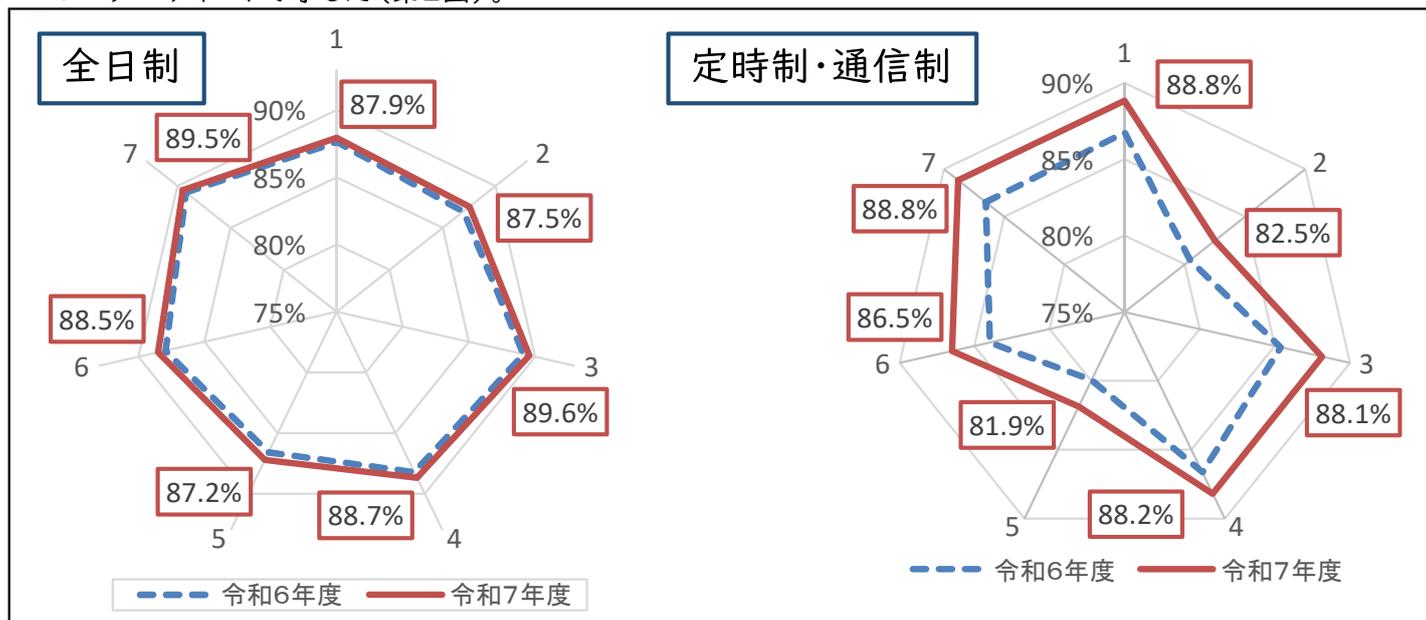
共通小項目	農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	理数	体育	音楽	美術	英語	平均
1	84.7%	87.6%	86.1%	92.6%	89.5%	99.1%	86.6%	90.3%	87.5%	95.3%	91.7%	91.6%	89.5%	88.2%
2	81.2%	85.2%	82.3%	89.7%	87.5%	100.0%	82.8%	89.3%	84.9%	93.3%	90.8%	89.6%	88.7%	85.6%
3	84.3%	88.2%	86.8%	92.4%	89.9%	99.7%	86.5%	89.6%	92.7%	93.6%	93.7%	94.8%	88.4%	88.5%
4	87.1%	88.5%	89.3%	93.4%	91.3%	99.1%	88.5%	90.4%	93.2%	93.9%	94.6%	94.1%	89.4%	89.6%
5	81.9%	85.1%	82.4%	88.0%	87.5%	100.0%	83.2%	89.5%	86.5%	92.9%	90.2%	92.0%	88.2%	85.7%
6	84.9%	88.4%	87.4%	92.1%	89.3%	100.0%	86.7%	89.7%	93.8%	88.8%	93.0%	93.3%	89.2%	88.4%
7	85.6%	88.7%	88.9%	93.0%	90.8%	99.7%	87.2%	90.7%	94.3%	94.0%	94.1%	93.2%	89.1%	89.4%

○共通教科及び専門教科全体について、肯定的な回答をした割合を、共通小項目ごとにレーダーチャートで示した(第1図)。



(2) 全日制課程及び定時制・通信制課程について

○全日制課程と定時制・通信制課程の共通教科全体において、肯定的な回答をした割合を、共通小項目ごとにレーダーチャートで示した(第2図)。



第2図 共通教科全体(課程別)において、肯定的な回答をした割合

○共通教科の平均では、肯定的な回答(かなり当てはまる)「ほぼ当てはまる」の合計)の割合が概ね高水準である(第1図)。特に、小項目3及び小項目7が相対的に高く、「考える・まとめる」「学びを関連付ける」学習活動は一定程度成果を上げていると考えられる。一方で、「対話的な学び」に関わる小項目2及び小項目5は相対的に低く、対話を通して自分の考えが「広がり・深まる」実感の形成に課題があることが示唆される。共通教科の小項目2及び小項目5についての傾向は、全日制の過程、定時制・通信制の課程でも同様である(第2図)。

○専門教科の平均では、昨年度と比べて肯定的な回答の割合が低下しているが、全体として概ね高水準である。一方、共通教科と同様に、小項目2と小項目5が相対的に低く、対話を通して自分の考えが「広がり・深まる」実感の形成には引き続き課題が残る(第1図)。

○小項目2と小項目5については、「対話そのものの活動」はあっても、「自分の考えを深める活動」に至っていない可能性がある。対話の前後で個人の思考を記録させたり、単元の最後に他者の意見で自身の変容した点を記載させたりする等の改善策を検討する必要がある。

○今後の課題の一つとして、肯定的な回答(「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」)のうち、評価4(かなり当てはまる)の割合を高めることが挙げられる。今回は肯定的な回答をした割合で分析しているが、評価4(かなり当てはまる)と評価3(ほぼ当てはまる)の割合は次のとおりである。今後は、授業で身に付けさせたい資質・能力をより明確にし、生徒一人ひとりに自らの学びをメタ認知させる取組を一層重視していく必要がある。

【共通教科】	小項目1	評価4:40.2%	評価3:47.8%	専門教科	小項目1	評価4:42.1%	評価3:46.1%
	小項目2	評価4:41.1%	評価3:46.3%		小項目2	評価4:39.8%	評価3:45.8%
	小項目3	評価4:41.6%	評価3:48.0%		小項目3	評価4:42.7%	評価3:45.9%
	小項目4	評価4:40.8%	評価3:47.8%		小項目4	評価4:46.0%	評価3:43.7%
	小項目5	評価4:39.0%	評価3:48.2%		小項目5	評価4:39.6%	評価3:46.1%
	小項目6	評価4:38.8%	評価3:49.7%		小項目6	評価4:41.8%	評価3:46.6%
	小項目7	評価4:40.7%	評価3:48.7%		小項目7	評価4:44.3%	評価3:45.1%

3 「生徒による授業評価」に関わる取組、授業改善に向けた取組など

(1) 「生徒による授業評価」の活用

「生徒による授業評価」をどのようにいかしているかについて、各学校から次のような回答があった。

- 1学期(7月)と2学期(12月)に行った生徒による授業評価の結果を集計し、各回答の割合をグラフ化したものを作成している。グラフでは1学期と2学期の回答の推移を見えるようにしている。作成した資料を職員会議で取り扱い報告したうえで、各教科会でも議題として取り扱い、来年度への授業改善の一助としている。
- 生徒による授業評価は7月に第1回を、12月に第2回を実施した。それぞれの結果は、担当者の担当科目ごとにまとめ、担当者に配付した。特に、第2回の結果については、各々の教員が自己分析し、授業改善につなげやすいよう、第1回の結果と比較できる形でまとめた。
- 年2回の授業評価のデータを比較・検討し、評価項目の中で特に改善すべき点はどこかを職員会議で周知するとともに各教科で改善に向けた協議を行っている。またそれらを踏まえて、翌年度の公開研究授業のテーマを設定している。
- 年間の授業改善計画の中に位置づけている。「第1回生徒による授業評価」に基づき、集計結果の分析と、各教科の今年度重点目標の達成状況等の検討を行い、研究授業に向けた各教科の課題や目標を設定を行う。「第2回生徒による授業評価」を参考に授業改善の成果と課題を総括し、次年度の指導方法の改善にいかしている。

(2) 「生徒による授業評価」に関する課題やその解決方法

「生徒による授業評価」に関する課題やその解決方法について、各学校から次のような回答があった。

- 生徒の回答率が低い科目があるので、実施期間を前倒しすること、期間を長くすることで改善を目指している。
- 評価項目を具体的・行動的な指標へ見直す必要があると考えている。PDCAサイクルを形骸化させず、実効性のある改善プロセスを確立する。
- 生徒にはGoogleフォームでアンケートを実施し教員が集計している。集計に関する負担は格段に軽減された一方、生徒の入力ミスが頻発しやすくなるので、落ち着いて調査に取り組むことのできる環境設定や丁寧な説明が必要である。

(3) 「生徒による授業評価」以外の授業改善に関する取組

「生徒による授業評価」以外の授業改善に関する取組について、各学校から次のような回答があった。

- 校内で年2回、授業見学・研究会を開催し、学校全体でよりよい授業づくりに向けた意識づけと情報共有を行った。また、全教員が各自の授業の様子を録画して授業を振り返る機会を設けるなど、学校全体で授業改善に向けた取組を行った。
- 公開研究授業を全教科で同時開催し、学校で一つのイベントにしている。総合教育センターの指導主事を招き、年ごとの授業改善テーマを共有し、全教科の教員が参加して行うことで、学校として組織的な授業改善の取組になるようにしている。
- 年度ごとに学校でテーマを設定し、テーマに沿った授業を実践している。また、研修会を行い、自身の授業実践を客観的に振り返り、「強み」と「課題」を可視化する機会を設けている。教科を問わず、意見交換することで、他者の実践や考えに触れ、授業改善の多様な視点を得られるよう取り組んでいる。

4 「生徒による授業評価」のよりよい活用のために

- 令和7年度に限らず、近年の推移から、各学校において「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた組織的な授業改善が継続的に進められていることがうかがえる。今後も、すべての生徒の学びがより一層充実するよう、「生徒による授業評価」により把握した課題を教職員間で共有し、改善の手立てを具体化・検証するなど、組織的な授業改善に取り組まれることを期待する。